

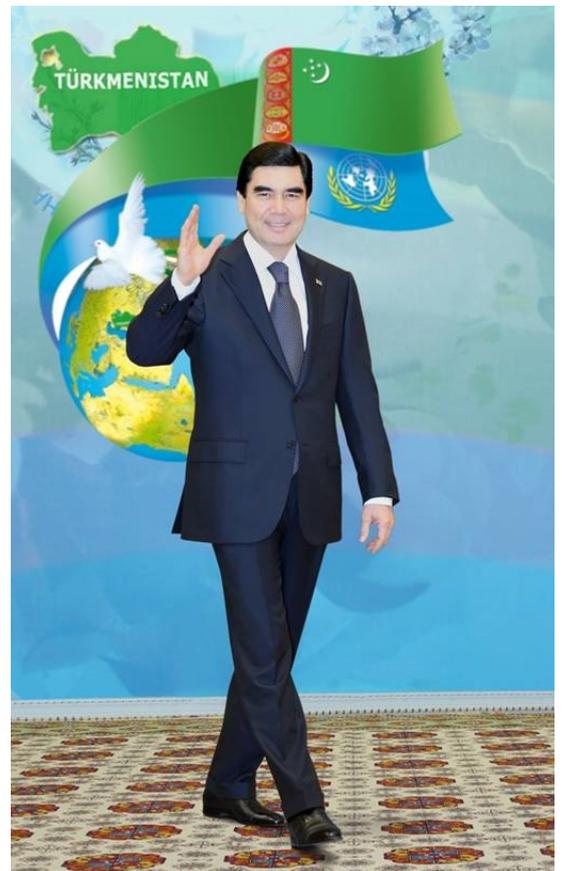
ユーラシアンホットライン

【トルクメニスタン特集号】

「アジアの永世中立国トルクメニスタン」国連総会承認（1995年12月12日）20周年

—アジアの北方型農耕センター、錫の道、シルクロードの十字路、民族興亡のアジア史を秘めて今—

中央アジアのトルクメニスタンといえば「カラクム砂漠」。今は乾燥した砂漠のヤングカラ大地には、アンモナイト、二枚貝の化石が露出し、この砂漠がかつて海の底であったことを示している。アジアの屋根、ヒマラヤ、天山山脈、アルタイ山脈も海の底であったことが知られており、人類が、地球を覆う薄皮一枚のプレートで生かされている存在であることを実感できるのがカラクム砂漠だ。この砂漠をかつて、今はアラル海に注いでいるアムダリヤ（オクサス）川が、東から西に直進し、カスピ海に注いでいたことが知られている。そしてこのカラクム砂漠の南に東西 400 キロにわたり、カスピ海まで続くのがコペトダグ山脈。東南でアフガニスタンに接し、西南でイランに接し、北でカザフスタン、北東でウズベキスタン、カスピ海を挟んでアゼルバイジャンに接する。コペトダグ山脈一帯は、古くは日本の雑穀農耕の起源ともなった「アジアの北方型農耕（雑穀）センター」であり、古代以来「ラピスラズリの道」「錫の道」「シルクロード」の要衝として栄え、アジアの民族興亡史の舞台となった。日本では、漢の武帝によって派遣された張騫が報告した安息国（パルティア）が存在した地域として知られている。今回特集号として紹介するトルクメニスタン共和国は、中央アジアの民族興亡史の最後に、北から勢力を広げたロシア - 「ソ連」がペレストロイカで崩壊した直後、1991 年 10 月 27 日独立した。大統領は、2006 年 12 月、サバルムラト・ニヤゾフ前大統領の死去後、元副首相で歯科医出身のグルバングル・ベルディムハメドフ氏が大統領に就任した。かつて交易とコペトダグ山脈やアムダリヤを水源とした農業で栄えたトルクメニスタンは、同時に民族興亡の歴史を刻んだが、1995 年 12 月 12 日の国連総会では、国連加盟国 185 カ国によって「中立国」として承認された。豊富な石油、天然ガスで国内が経済的に安定し、南にアフガニスタン、イラン、イラク、シリア、カスピ海対岸のコーカサスと、地域紛争が激発する時代の中、アジアの緩衝地域として機能し始めているようにみえる。大統領の交替劇で政権の危機を乗り切ったキルギスを除けば、カザフスタンもウズベキスタンも、そしてトルクメニスタンも、まだ旧ソ連崩壊後の政権構造の中にあるとはいえ、ベルディムハメドフ大統領は、国際化の時代に対応した改革開放の姿勢や、天然資源による利益を自国民の生活向上に還元する姿勢を強く示し、トルク



メニスタ
ンではイ
ンターネ
ットは公

開され、CNNやBBCの受信も行われ、周辺国より相当程度にインフラ整備も進み、トヨタ車を中心（8-9割）とした車社会が浸透し、公共料金の無料化、娯楽（オペラ、サーカス、映画等）の解禁にも踏み出している。民族興亡史の真ただ中を潜り抜けたトルクメニスタンという国は、「中立国」の舵取り次第では、アジアの安定に力を発揮するかもしれない。日本ではあまり知られていないトルクメニスタンの今と昔を紹介する。

1【トルクメニスタンの今】

【どこにある国か?】 コペトダグ山脈の北に位置し①西端はカスピ海に接し、②東端はウズベキスタンのアムダリヤと接し、③南はイランとアフガニスタン、④北はウズベキスタンのカラカルパクスタンとカザフスタンに接している



トルクメニスタンの
国旗 →
国章 ←



【国土の面積人口】 東西 1,100 キロ、南北 650 キロ以上。面積は 49 万 km² と日本の 1.3 倍。トゥラン平野を含む国土の 85% はカラクム砂漠。人口は 518 万人。100 以上の民族が暮らす多民族国家。85% がトルクメン人。公用語はトルクメン語。トルコ語に近い。

【気候・宗教】 カスピ海沿岸を除き厳しい大陸性気候。7 月の平均気温は 32 度を超え、乾燥。冬は北部と南東部で -15 度前後になる。年間平均降水量はカスピ海沿岸のカラボガス湾で 95 ミリ、山岳部で 398 ミリ。宗教はイスラム教だが、宗教の自由を保証。

【首都・通貨】 アシガバード。人口 75 万人。通貨はマナト。コペトダグ山脈の東部丘陵に 1881 年建都。行政、経済、文化、科学の中心で、省庁、公的機関、大学、住宅美術館、劇場など、大理石をふんだんに使用した白亜の巨大高層建築が立ち並ぶ。

【トルクメニスタンの特色①】：永世中立国の選択。

【独立】

1985 年、ゴルバチョフがソ連共産党の書記長に就任、ペレストロイカ（改革）を提唱、グラスノチ（情報公開）を推進し、ベルリンの壁崩壊等で国際政治に大きな寄与を果たしたが、1991 年のクーデターで失脚、ソ連は崩壊した。トルクメニスタンは、1990 年 8 月、主権宣言を発表、10 月には、第一回国民投票でサバルムラト・ニヤゾフ氏が大統領に当選。1991 年のソ連崩壊後、10 月 26 日の国民投票で独立を宣言、翌 1992 年 5 月には、ロシア・C I S 諸国との集団安全保障条約の署名を拒否。1995 年 12 月、国連総会で「永世中立国」として承認された。2006 年急死した前大統領のニヤゾフ氏は、2002 年終身大統領に就任し「独裁」と言われることもあったが、2005 年に、近く 70 歳を迎えるとして、ニヤゾフ氏自らは候補者とならない大統領選挙を 2009 年に実施することを発表しており、北朝鮮のような一族世襲支配の考えはなかった。死後国民投票によって 2007 年 2 月、グルバングル・ベルディムハメドフ現大統領が当選している。民族興亡史の舞台となったトルクメニスタンが、不安定な周辺アジア地域の中で「永世中立国」を選択した意義は大きい。

【産業と衣装】 ガラス製造、ぶどう酒醸造、綿織物、果樹栽培、特に絨毯（後述）は世界的に有名。国を代表する五部族は絨毯の文様で示される。服装は女性がクイネク（ワンピース）、男性がカルマズドン（どてら）にタフヤ、テルペクと呼ぶ帽子を被る

【生活】 食事はトルクメニスタンメロンを初め豊富なフルーツ、羊やカスピ海産のチョウザメのシャシリックも。イスラム優位だが豚肉も食べる。電気、ガス、水道、医療、教育が無料。日用雑貨も低価格。衛星放送が普及、インターネットも開放の予定。

《駐日トルクメニスタン大使館 グルバンマメット エリャゾフ特命全権大使インタビュー》

立会者；グルバンマメット エリャゾフ特命全権大使



ゴーフル ベルディエウイ三等書記官（通訳）

特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ；
江藤セデカ理事長、大野遼会長

成宮勇理事（写真）、斉藤桂子、
永田眞一理事（記録）

2015.4.21 大使館にてグルバンマメット エリャゾフ特命全権大使と、NPO 法人ユーラシアンクラブの江藤セデカ理事長、大野遼会長他で会見インタビューを行った。

大野；永世中立 20 周年の話聞いた。

アジアの中でどういう立ち位置を考えているか聞かせてほしい。

大使；永世中立について説明したい。外交政策で中立を歩んでいる。

1991 年独立、トルクメニスタンとして外交をどうしていくか考えるうえで、いろいろな国があり安定していない国もある。そこでどういう外交か考えたとき平和の道から始めれば成功すると考えた。1995 年国際連合で 185 か国が同意しトルクメニスタンが永世中立国として認められた。(12 月 12 日) 中立国の特徴として、スイスは戦争のときだったが、トルクメニスタンは平和の時に決めた。185 か国が承認したことも特筆されると思う。外交政策の主なものとして 2 国間、多国間のあいだで相互理解の関係を作り、内政不干渉を基本にしている。

中立国として 20 年、得たものは国内外で戦争が行われず、平和な外交関係が樹立された。教育の発展を希望している。中立国として 2007 年アスカバッドに安定した状態を地域で守られることを目的としたセンターが作られた。

大野；隣国アフガニスタン、イラン、イラク、またロシアに囲まれた中で中立国を目指したのはとても良い判断だと思う。

1993 年 2 月ユーラシアンクラブが設立されたが、その前々年 1991 年旧ソ連崩壊を現地で経験した。先ほど、奥様の妹さんに絨毯の説明をしていただいたが、その絨毯が発見されたパジリク古墳を掘っていた。事業に携わりながら、旧ソ連崩壊の結果、アジアがその後どういった方向で生きていくかを考えた。トルクメニスタンが中立国を作ったように私はユーラシアンクラブを作った。私は 20 年間苦労した結果、アフガニスタンのセデカさんがユーラシアンクラブの理事長に就任した。

セデカ；アジアで様々な戦争が起きている。

それを文化を紹介することでなくしたい。

トルクメニスタン、アフガニスタンともさまざまな言語を使っている。(わかる言葉もある)これからお互いに日本に文化を伝えていきたい。

大使；我々の目的も同じで 2 国間関係を発展させたい。政治だけでない関係を作りたい。

2 国間で友好的に発展させたい。

友好で問題は解決するという気持ちでいる。

国の文化を紹介することが大事でこれからはメディア(新聞・テレビ等)を通じ伝えていきたい。ユーラシアンクラブが行っていることは大変大事なことと思っている。ユーラシアンクラブの力を借りたい。アジア国民の文化紹介について我々も協力したい。日本のこともトルクメニスタンで紹

介していきたい。民族衣装など日本に紹介して欲しい。これからユーラシアンクラブを通してトルクメニスタンの様々な面を紹介していきたい。間違って伝わる恐れのあるインターネットを使った媒体だけでなく、人々にきちんと説明する機会を持ちたい。

大野；セデカ理事長に期待するのは、アジアから見える日本の視線だ。

大使は日本にいるときに、アジアからの目でトルクメニスタンを見ることが出来たと思う。

この見方による改善が出来たら良い。

日本橋三越でアジアシルクロードウィークを開催する件で、明日モンゴル国大使と会い 7 か国共催が出来る。メディアに働きかけ、毎日各国大使のコメントをマスコミに流したい。

大使；それは良いと思う。

トルクメニスタンはその用意が出来ている。

大使館では東京の博物館で 1 週間トルクメニスタンの紹介を考えている。

三越でも行えればトルクメニスタンの紹介が続けられる。

大野；アフガニスタンのラピスラズリー、アムダリアの遺跡バクトリア・マルギアナ考古学複合に興味を持っている。国家・民族の発祥に関することも関連付け紹介したい。

大使；トルクメニスタンは砂漠とされているが、アムダール川はカスピ海に流れ込んでいた。

歴史の勉強もしているので、場を改めて詳しく話をしたい。

カラクム砂漠についての資料を出していきたい。

大野；アリーナ・ワエージェフについても調べている。

大使；人類の生まれたところ。

これからもいろいろなイベントを行うので参加してほしい。今年メインのイベントは 11 月 12 日国際会議が 15:30~外交官家族参加で行われる。永世中立国のアピールの場としており、招待状を送りたい。この日はダンスグループも来る。

大野；10 年間文化庁の芸術情報プラザのトータルアドバイザーをしていた。情報がわかれば会場案内等の協力が可能。

大使；一緒に行動したい。

セデカ；サハ共和国から子供たちが来たり、音楽交流をしている。アフガニスタンも参加して欲しい。

大野；オペラのプロデュースもした。今年の秋、神奈川宮ヶ瀬ダムでアジアシルクロードウィーク野外版を文化体験型で行う。こちらにも参加・協力をお願いしたい。

大使；本日は大使館に来ていただきありがとうございます。これからもよろしくお願ひしたい。

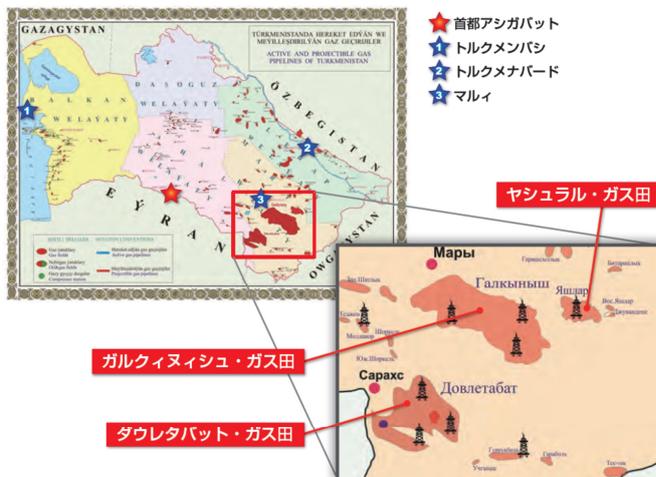
長時間にわたる会見ありがとうございました。

【トルクメニスタンの特色②】ロシア、イラン、カタールに次ぐ世界第四位の埋蔵量—天然ガス開発

旧ソ連時代の最も大きな動きの一つが石油、天然ガスの採掘であり、特に天然ガスは埋蔵量世界第四位と推定され、永世中立国トルクメニスタンを支えている。

※石油開発は18世紀後半には西部のカスピ海に突き出たチェレケン半島で小規模な石油生産が始まり、本格的に採掘されたのはトルクメニスタンがロシアに併合されてからで、旧ソ連時代の1930年代から60年代に本格化した。

※天然ガスは1960年代後半から、トルクメニスタンの北東部を中心に膨大な埋蔵量を有する鉱床が見つかった。グルバングル・ベルディムハメドフ大統領は、2015年1月9日に開催した政府会合で15年の天然ガス生産量を前年比で9%増の838億立方メートルまで増産し、このうち480億立方メートルを輸出に振り向ける考えを示している。天然ガスの輸出先では、ロシアとの関係を維持しながら、近年は中国との関係を強化している。中国が最大の天然ガス輸出先だ。今後は、インドなども有望なガス供給先として天然ガスパイプラインの早期建設を指示している。



(注) ★は主要都市の位置
出所：Turkmengaz資料に筆者加筆

J OGMEC 2014.1 Vol.48 No.1 より

【2013年5月在日トルクメニスタン大使館開設】

※日本との関係も近年密接になっている。2002年にコマツ(Komatsu LTD.)と伊藤忠商事は、トルクメニスタン政府との間でパイプラインの建設修繕のために2010年までに毎年200台の重機を供給する契約を結び、その翌年にはアシュガバードに訓練センターを設置。2009年12月、ベルディムハメドフ大統領が来日、2010年には国際協力銀行(JBIC)がアンモニアおよびヒ素肥料製造プラント建設のために総額450億円を限度とする融資にトルクメニスタン政府と合意、双日と川崎重工が建設を受注している。2013年3月には「日本トルクメニスタン投資環境整備ネットワーク」が創設され、2013年5月には在日トルクメニスタン大使館が開設され、9月11日～13日にはベルディムハメドフ大統領が2009年12月以来2回目となる来日を果たした。首脳会談では、「日本国とトルクメニスタンとの新たなパートナーシップに関する共同声明」や「技術協力協定」など6つの合意文書が調印されるとともに、民間レベルでも約200億円の資金調達をJBICが支援する硫酸製造の化学プラント建設を双日と三井造船が受注した。このように、ベルディムハメドフ政権の外交・国内政策の変化により、日本とトルクメニスタン関係は新しい段階に入っている。



日本企業の成果 Ýapon kompaniýalarynyň işleri

アンモニア・尿素肥料製造プラント
三菱商事(株)、三菱重工(株)
(受注)写真は参考
Garabogaz- Ammiak karbomid
öndürýän zawodyň gurluşygyna
başlanyldy.



アンモニア・尿素肥料製造プラント
2014年双日(株)、川崎重工(株)
Mary, Ammiak karbomid
öndürýän zawod



※【**ダルヴァザの「地獄の門」**】アシガバードから北260 kmにある、ソ連時代のガス鉱床探査で陥没し、1971年噴出したガスを点火して以来40年あまり燃え続けているダルヴァザの通称「地獄の門」は、トルクメニスタンの豊富な天然ガスを示す観光名所となっている。2010年に、ベルディムハメドフ大統領は鎮火の指示を出したが、まだ手法が見つかっていない。

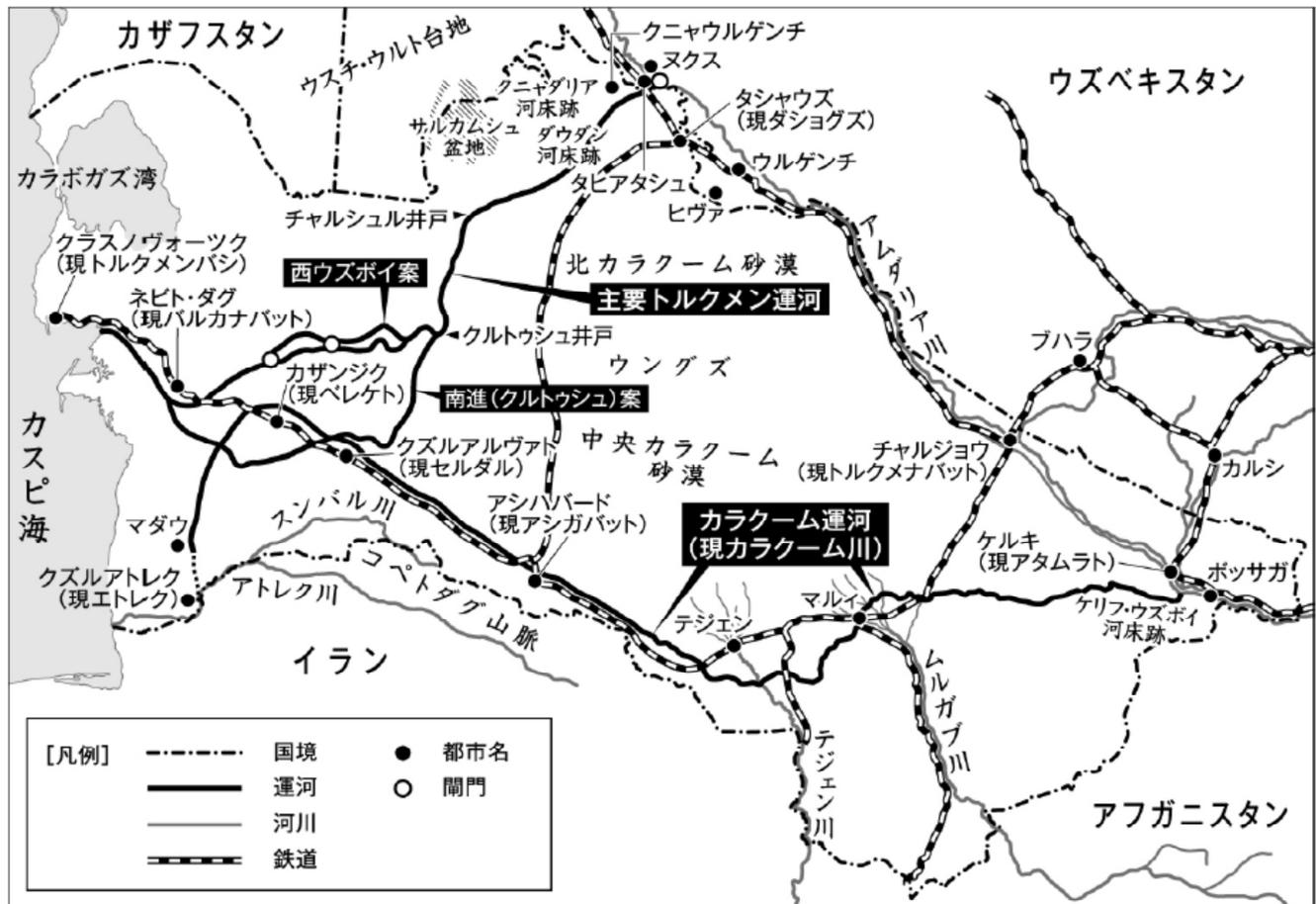
※天然ガスではないが、中国の新疆ウイグル自治区のリウホウガン炭鉱が坑内火災で130年間燃え続け2004年鎮火したケース、米国ペンシルベニア州のセントラリア炭鉱が坑内火災で1962年以来燃え続け、町はゴーストタウン化し、鎮火には数百年かかるとみられているケースが知られている。

【トルクメニスタンの特色③】古アムダリヤを復活させたカラクム運河—砂漠の緑化、灌漑 綿花・果樹園栽培

旧ソ連時代の最も大きな動きの二つ目は、カラクム運河の建設だった。アラル海に注ぐアムダリヤは、かつてカラクム砂漠に向けて流れていたことが分かっており、その流路は「ケリフ・ウズボイ河床跡」として知られていた。ムルガブ川、テジェン川と合流してカラクム砂漠を潤し、カスピ海に注いでいた。今は枯渇した古アムダリヤの復活とも受け取れる事業計画の作成は戦前から始まり、1946年9月に完成、1947年1月、ソ連邦国家計画委員会（ゴスプラン）で承認され、下記するように「主要トルクメン運河」計画が、スターリンの死で中止された翌年1954年、カラクム運河建設は開始された。

地図1 主要トルクメン運河とカラクム運河

『スラヴ研究』No. 56 (2009) より



※【**主要トルクメン運河計画**】帝政ロシア時代から構想が存在し、スターリンの「自然改造計画」のトルクメニスタン版として、「砂漠の緑化」を掲げて検討された「アムダリヤの水をカラクム砂漠に転流」する「主要トルクメン運河」計画の動きであった。スターリンの死後この計画は反故になったが、「エニセイ＝オビ＝アラル＝カスピ海水資源コンプレックス」とともに、シベリア河川転流計画も付きまとっていた。

※【**人類史の謎を秘めたメルブの遺跡**】ムルガブ川がカラクム砂漠に流入しデルタを形成しているマルギアナ（古代ギリシャ人による地名。アケメネス朝ペルシャのダリウス王のビヒストゥン碑文ではマルグシュ）にあるマルグ

シュの遺跡は 1904 年-08 年のパンペリー調査団以来注目されてきた。旧ソ連時代以後も、コペトダグ山麓を含め、マルグシュの遺跡の発掘調査は続き、特に第二次大戦後、1955-56 年、1969 年、ソ連、タシケント、アフガニスタン、トルクメニスタンの考古学者によって調査は続けられ、タシケント大学で考古学を学び、学生の頃からマルグシュ遺跡に関わり続けた V. サリアニディ氏は 1975 年、アムダリヤ川を挟んだバクトリア（北）とマルギアナ（南西）地域の青銅器時代の文化は大変似ており、一帯のものであると「バクトリア・マルギアナ考古学複合」を提唱した。そしてその遺跡の特徴から、拝火とハオマ（醗酏飲料）を特徴とする原ゾロアスター教に関連すると主張、「インド・イラン系のアーリヤの故地」であるか、インダス文明のハラッパ等と関わりある遺跡であるか、世界の考古学者、言語学者を巻き込んだ、大論争を巻き起こしている。

【トルクメニスタンの特色④】トルクメン部族が支えた絨毯芸術：300 平方メートル 1 トンのギネス登録絨毯も

トルクメニスタンの最大の誇りはアハルテケ（トルクメニスタン原産の名馬；後述）と絨毯である。トルクメン絨毯は、アラル海周辺から南下したオグズ部族がそれぞれ継承してきた絨毯模様が知られ、トルクメニスタンの国章の中央にある赤い円の内部に、代表的な 5 つの「部族絨毯」として示されている。5 つの部族は、テケ (Teke / Tekke)、ヨムト (Yomut / Yomud)、アルサリ (Arsary / Ersary)、チョウドウル (Chowdur / Choudur)、サリク (Saryk / Saryq)。17 世紀に離散した原オグズ部族サロル族は示されていないが、Basjir, Salor, Tekke, Tjaudor, Yomut など、絨毯の種類の一つとして伝えられている。絨毯の文様、モチーフの中には、部族の文化的価値観が凝縮されている。トルクメニスタンの女性の芸術で、絨毯の織り機は広く家庭に普及している。



トルクメン絨毯は、古代インドの叙事詩「ラーマーヤナ」や「マハーバーラタ」、フェルドウスィーによる「シャーナーメ」と中世のアラビア語文学の「千夜一夜物語」、ホメロスの作品、アルクマンやヘロドトスによるギリシャの年代記、中国の歴史家司馬遷の作品、「アヴェスター」、中世の作者 Maksidi による「Hudud al-'Alam」などに登場し、13 世紀のイタリアの探検家マルコポーロも「世界で最も美しく、繊細」と記し、ルネッサンスの画家もトルクメン絨毯を描いている。

首都アシガバードには、世界で唯一のトルクメン絨毯の博物館があり、歴史的な巨大絨毯が展示されている。その中の一つは、301 平方メートルの第 4 の巨大絨毯で、1200 キロの重量を誇っており、2001 年に織られ、世界最大の絨毯工場の手織り絨毯の最高傑作としてギネスブックに掲載。ベルディムハメドフ大統領は、絹の絨毯の生産を提案。現在、絹糸の絨毯はベレケット、バルカナバート、ギョクテペ、ハラチ、ケルキチとマリ、そしてアシガバート芸術機構で製造されている。

【トルクメニスタンの特色⑤】サラフレッドのルーツ、トルクメニスタン原産の黄金の馬「アハルテケ」



アシガバードには、「サパルムラト・トルクメンバシ記念国立養馬コンプレックス」と呼ぶ、競馬場、厩舎、アハルテケの養馬施設がある。

砂漠を駆け抜ける黄金の馬
約3000年前の昔、放群の持久力と暑さに対する抵抗力を備えた馬が、イラン北部の砂漠地帯で飼われ始めました。大胆で忍耐強く、流麗な走りを見せるこの馬はアハルテケと呼ばれ、現在も馬術競技で活躍しています。金色に輝く毛並みを風になびかせて走るアハルテケは、世界で最もめずらしく、かつ美しい馬と言えるでしょう。
平成18年10月 東京競馬場

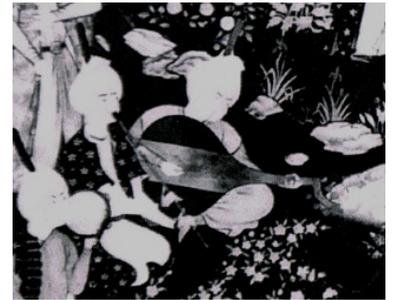
「世界で最も美しい馬」と評されるのがアハルテケと呼ばれるトルクメニスタン原産の最古の馬種。1881 年、ロシアの将軍クロポトキン、アハル・オアシス近辺で暮らしていたテケ・トルクメン部族との戦争の後に、トルクメ

ン人の馬に愛着を感じて育成牧場を設立し、この馬の名前を「アハルテケ」と名付けた。アハルテケは、サラブレッドの三大始祖の一頭バイアリータークを通じてサラブレッドのルーツになったとされる。長い耳とアーモンド形の眼、金属色の光沢のある馬体から「黄金の馬」とも呼ばれる。漢の武帝が求めた「烏孫の西極馬」大宛の「天馬」「汗血馬」ではないかとも想像される。馬体の金属光沢は、過酷な気候に適應して、カラクム砂漠でのカモフラージュとして生じたとされている。傾斜した肩と長く直立した首、発達した筋肉で、スピードと耐久力があることが知られ、1935年には、カラクム砂漠を水なしで3日間かけて400^{キロ}走り抜け、アシガバードからモスクワまで4000^{キロ}を走破した。トルクメニスタンの国章の中央の青色を背景にアハルテケは示され、トルクメン人の誇りを示している。ロシア人の間で特に人気となり、北コーカサス山脈に育成牧場があるほか、ヨーロッパ、オーストラリア、北アメリカでも育成されている。馬術競技用の馬として知られ、日本では京王線の府中競馬正門前駅（東京競馬場）に「砂漠を駆け抜ける黄金の馬（アハルテケ）」と記した解説版の上に、アハルテケの銅像が立っている。

【トルクメニスタンの特色⑥】音楽と詩



バグシ（吟遊詩人）が健在な国である。18世紀の国民的詩人マグトゥムグリ・ピラギの詩もバグシによって歌い継がれてきた。その伴奏楽器の中心は二弦の楽器ドタールであり、擦弦楽器のギジャックである。ドタールは、カザフ（スタン）のドンブラによく似た楽器のペ



ルシャ語名。ギジャックは、イランから中央アジア一帯で使用されているペルシャ系の楽器。トゥイドックと呼ばれる縦笛は、叙事詩人フェルドウシーが1010年に完成させた「王書（シャーナーメ）」の細密画にも描かれている古い笛である。トルクメニスタンの音楽にも、ペルシャ系とトルコ系の民族興亡史が反映されている。

※マグトゥムグリ・ピラギの詩（「マグトゥムグリ詩集～トルクメンの偉大な詩人～」から）

マグトゥムグリの詩には、悲しみや苦しみ、無常な運命を歌っている詩が多いが、それは世界の破滅や地獄から生き返り、楽園に生き、愛や美しい妖精を待ち焦がれる、深い情念を吐露するメッセージ性の故であろう。トルクメンの人々は、バグシがドタールの演奏で歌う、言葉の非情さの裏に、真実や正義、希望を希求する覚悟を受け止めて、熱狂したと考えられる。マグトゥムグリが、現実を直視していた詩人であることは次の詩「何が起こるのか」の一節でわかる。

・・・

大きく口を開けて死がせまる
大地は人々の腰を抱き
笑いながらこの世に生まれし者は泣きながら逝く
世界は我らの涙を憐みはせぬ

幸運や運命に頼ってはならぬ
あれほどあてにならぬものはない
財宝だとしてあてにはならぬ
この世は夢のごとし

・・・

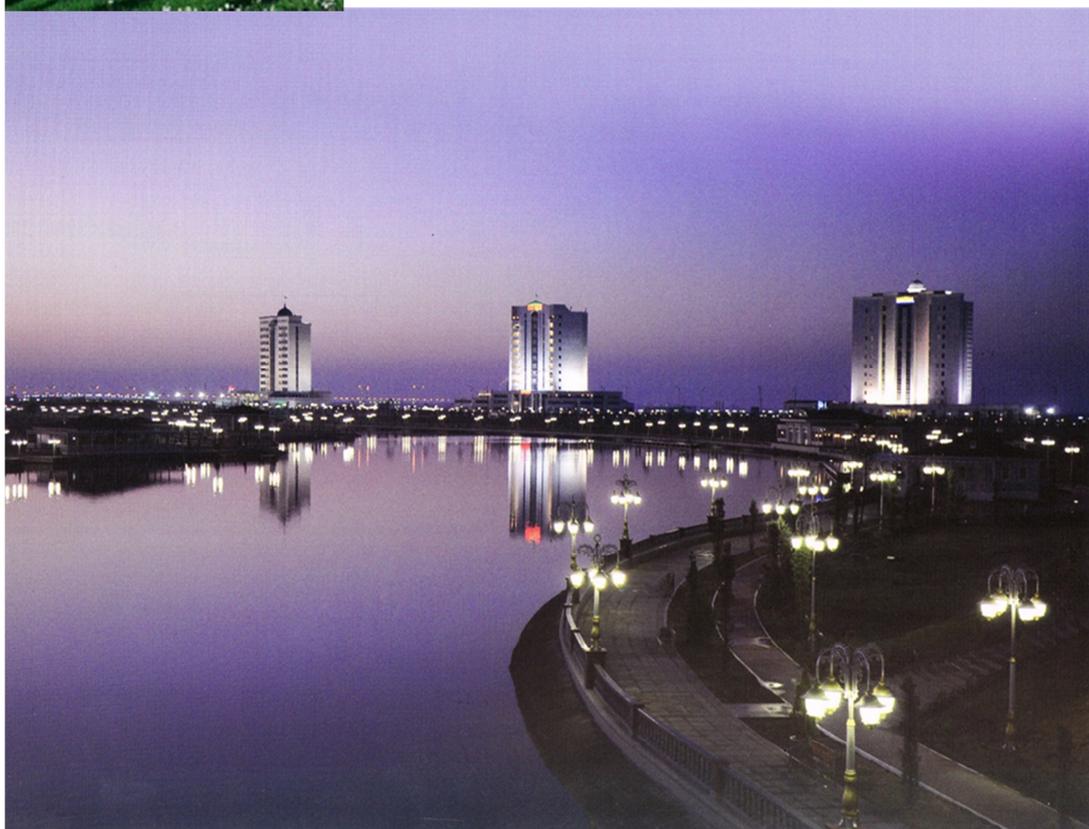


ベルディムハメドフ大統領は、マグトゥムグリを紹介する前文で、「ひとりの人物を中心に据えた民族団結」を呼びかけた人、と紹介し、「もしみなが揃って食卓を囲むならば 必ずや栄える国となるだろう」（マグトゥムグリの詩「トルクメンの未来」の一節）と詩人が予見した通りの、「平和と安定の国」、「永世中立国」になったと書いている。不安定で問題山積の中央アジア、西アジア諸国の中での舵取りに期待したい。

【トルクメニスタンの特色①】

首都アシガバードの都市景観—白い街—大理石の巨大ビル

「アシガバード」は「愛の町」の意。イランとの国境コペットバーまでわずか 5 キロ、コペトダグ山脈東部の丘陵に位置している。政治、経済、行政、文化、科学の中心で、美術館、劇場、ホテル、公園、広場には壮大なモニュメント、文化的にユニークな建築や高層住宅が、白大理石をふんだんに使った巨大都市を形成している。35 m 四方、重さ 420k という巨大なトルクメニスタンの国旗を掲揚した、高さ 133m の塔は、ギネスブックから「世界で最も高い旗竿」として登録されている。



「愛の町」は、白大理石をふんだんに使った白亜の巨大都市

【トルクメニスタンの観光地図・観光名所】—アジア史が見えるトルクメニスタン—



【トルクメニスタンの昔】

トルクメニスタンは、古来、ラピスラズリの道、錫の道（銅や金含む鉱石ネットワーク）、シルクロードの要衝に位置し、シュメール・インダス文明と北方型遊牧民の狭間で始まった諸民族の接触融合地域で、現代につながる古代国家揺籃の地であった。コペトダグ山脈一帯は、北方型雑穀農耕形成のセンターとして知られた。一方歴史的には、アンドロノヴォ遊牧民の南下、ペルシャ帝国の形成、アレクサンダーの進出とヘレニズム、パルティア帝国、クシャン帝国、エフタル、ササン朝、突厥帝国そしてイスラム帝国の時代にはウマイア朝、アッバース朝、サーマン朝、ガズナ朝を経て、セルジウクトルコ帝国形成—と歴史の狭間にもあって、コペトダグ山脈一帯は、民族興亡の歴史に翻弄された。

中央アジアのトルコ化が進むのは、6世紀後半。突厥の支配が及んだ西突厥（581年～741年）以降。一方、九姓鉄勒（トクズ・オグズ）と呼ばれた、バイカル湖周辺からモンゴル高原にいたトルコ系民族同盟は、840年ウイグルがモンゴル高原から西遷する頃から、中央アジアに進出。アラル海周辺にいたオグズ一族が、アムダリヤを越えて南下し、10世紀以降イスラム化し、セルジウクトルコ帝国（1038年から1157年）を形成する頃から、トルクメンと呼ばれるようになった。

紀にはチムールなどモンゴルののけて、今のトルクメニスタンで、これらの部族はサロル同盟とよは分裂したが、東西のヨムド部され、サロル部族は、少数の原、アフガニスタン、中国など



13世紀以降、チンギスハンの侵略、14世支配にあつたが、14世紀から16世紀に現在に至るトルクメン部族の形成が進んだ。大部族連合を形成し、17世紀末には連合族、コペトダグ山脈沿いのテケ部族が形成オグズ部族として、トルコ、ウズベキスタトルクメニスタン内外に住んでいる。

こうして分裂したトルクメン人部族の協力を訴えたのが18世紀の詩人マグトゥムグリ・ピラギで、現在トルクメニスタンの国民的詩人として紹介されている（「マグトゥムグリ詩集～トルクメンの偉大な詩人～」）。

19世紀後半になると、ロシアの植民地支配がおよび、カスピ海に港湾クラスノヴォツク（今のトルクメンバシュ）

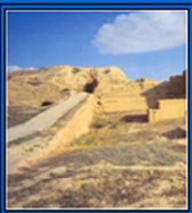
が建設され、アシガバードまで鉄道が引かれた（現在タシケントまで延伸）。ロシアは 1881 年、アシガバード北西の最後の砦「ギョクテペ要塞」を陥落させて、ロシアとペルシャの条約で現在まで引き継がれる国境線を敷き、1897 年同様の条約でアフガニスタンとの国境線も確定した。ロシア併合後、ツァーへの反乱、ロシア革命後、中央アジアのバスマチ運動が 1920 年代から 30 年代にかけてトルクメニスタンでも発生し、多くのトルクメン人が犠牲になった。1922 年共産主義者はソビエト社会主義共和国連邦を創設した。2 年後の 1924 年 10 月には、中央アジアを分離し、ソビエト社会主義共和国連邦の一員として、今のトルクメニスタン共和国の領域に相当するトルクメン・ソヴィエト社会主義共和国が誕生。その後スターリンの過酷な抑圧や個人財産の没収などにトルクメン自由主義を掲げた反乱が起きてロシアの支配権は揺らいだが、スターリンは 1932 年トルクメン社会主義共和国を再生させた後、何千人ものトルクメニスタンの共産主義リーダー達を処刑し、中には大統領や首相も含まれ、国家主義者を支援したと非難した。1930 年代のテロの後、アシガバードの共産体制は完全にモスクワの中央ソビエト政府に従順になった。第二次世界大戦を経て、戦後、アシガバードやチャルソ（トルクメンバシ）に工場を建設、多くのロシア人、ウクライナ人が移住したが、多くのトルクメン人は田舎に住み、遊牧生活をしていた。

以上のような歴史を反映し、トルクメニスタンには様々な時代の遺跡が多く残され、発掘調査も行われている。ゾロアスター教、仏教、キリスト教、マニ教、イスラム教の宗教遺跡も多く、そして最後はロシア・ソ連の南下など、シルクロードを往来した諸民族の十字路、接触融合地域であることを示している。トルクメニスタンには、「中立国」から見えるアジア史が存在しており、アジア史を考えるには最適な国である。

【トルクメニスタンの歴史文化遺産】

首都の近郊（南東 8 キロ）には、小麦と彩文土器を伴う人類最古の農耕文化として世界的に有名なアナウ遺跡があり、西 15 キロにはパルティア帝国の初期の都城遺跡ニサがある。アシガバードから東方 330 キロに位置するマリ市（メルブ、マルギアナ）には、古代アマダリヤとマルグブ川が合流するデルタ地帯に栄えた中期青銅器時代の遺跡マルギアナ遺跡が存在し、人類史の謎を秘める「バクトリア・マルギアナ考古学複合」として世界の考古学者、言語学者の間で議論を呼んでいる。マリ市には、アジア最西端の仏教僧院遺跡も発掘されている（「メルブの仏教僧院址研究ノート」加藤九祚）。マルグブ川の西を北進するテジェン川流域は、ゾロアスターがアヴェスターを残し、ゾロアスター教形成の地と考えられるアリヤナ・ウェージェフ（北ホラーサン）と考えられている。トルクメニスタンの遺跡から出土した遺物は、トルクメニスタン国立博物館に展示されている。

ニサ遺跡 Nusaý galasy



発掘された
リュトン



装飾具 Saý-sepler



メルブの遺跡 Merw



スルタン・ サンジャール 廟→



←キズ・カラ

トルクメン料理 Türkmen tagamlary



【ギョクテペのモスク】



ク」。134 年前の犠牲者を慰霊するモスクとなっている。

また、トルクメン人がロシア軍に敗れ、ロシアに併合されることになった1881年1月のギョクテペの戦いは、ギョクテペ要塞でトルクメンのテケ部族最後の反抗が試みられたが敗れ、婦女子を含め 15000 人が犠牲になったとされる。帝政ロシアの中央アジア征服の最後の戦争とされ、以後トルクメン人は戦意を喪失し、85 年までにトルクメニスタンの南部はロシアに帰順した。トルクメニスタンの民族興亡史の最後がロシア - ソ連の支配として 110 年間続き、旧ソ連崩壊後の独立と共に、未来につながる国の生き方として選択したのが「永世中立」(1995 年)であった。写真は、アシガバードから西 40 キロにあるギョクテペ要塞の跡に建てられたモスク「サバルムラト・ハジ・モスク」。

【アワザAWAZA】カスピ海の真珠ーカスピ海に臨む総合リゾート観光施設



アワザは、地元の言葉で「海の織物」という意味で、さざ波が醸す「自然のシンフォニー」がイメージされている。トルクメニスタンの西端、「中央アジア海」というべき「カスピ海」の東海岸に位置している。カスピ海は総面積 37 万 2 千km²。南北 1300 ㎞、東西 200~800 ㎞。海面は、世界の海とは接しておらず、海拔マイナス 29.5m。ボルガ川、ウラル川、クラ川、テレク川、エンバ川がこの海に注いでいる。この海は「ヒルシネ」「フバルン」「カスピアン」などさまざまに呼称された。地元では、年長者への尊敬を込めて「ゴジャ ハザル」と呼んだ。中央アジアの大河、アムダリヤはかつ

て長い間カスピ海に注ぎ、巨大な海を形成していた。丘の上からカラクム砂漠を望めば、アムダリヤの旧河床ウズボイ川が確認できる。歴史の父ヘロドトスは、「ヒルシネ川の海の男、アケメネス朝のサカ・コサックが紀元前 5 世紀に 80 年にわたってギリシャに敵対した」と記している。トルクメニスタンの領土に属するカスピ海の海岸は 600 ㎞にわたっている。この海を隔てて、アゼルバイジャン、カザフスタン、イラン、ロシアと接している。カスピ海はヨーロッパとアジアをつなぐ海でもある。カスピ海には、世界のチョウザメの 9 割が保護されていることで知られ、ニシン、ブラックバス、ボラ、など多種の魚類に恵まれている。ヨウ素を含むカスピ海の海水は健康に良いさまざまなミネラルを豊富に含んでいる。治療効果のあるさまざまなセラピーが用意されている。「気管支ぜんそくなど虚弱体質改善によい」など多くの治療効果が紹介され「ギリシャ語で《海》を意味するサラッサセラピーでは、海水、砂、気候、海藻、粘土、鮮魚をふんだんに利用した治療が行われ、食事、マッサージ、運動や温泉療法が組み合わせられる」「アワザ国立観光拠点は、トルクメニスタンや外国の市民が休息し、健康を回復する中央アジアで唯

一の〈海〉セラピーセンターである」。4月～10月の海水の平均温度は18度以上。年間日照時間は2700時間、昼夜の気温差は6-8°以内。自然界には92の化学物質があり人間の体内にはうち81を含むが、カスピ海には82の化学物質があるとされている。

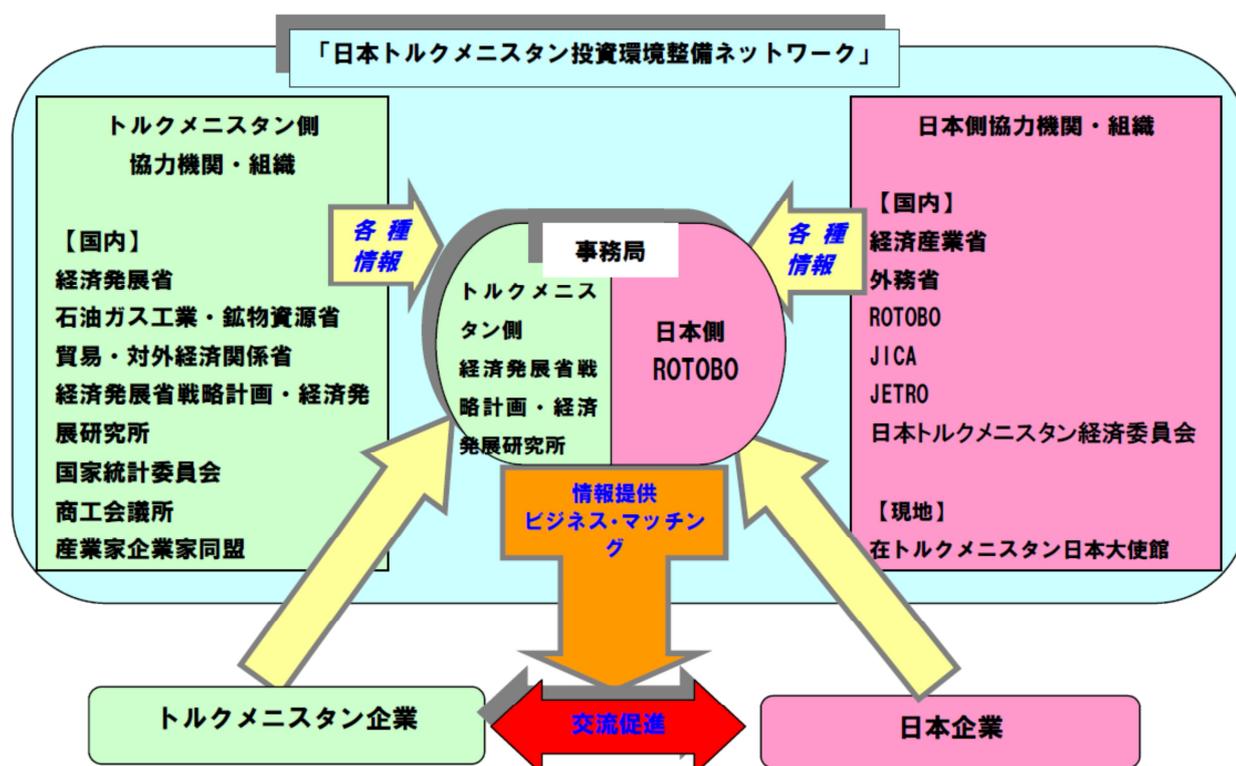
アワザの建設計画が明らかにされたのは、2007年にロシア、カザフスタン、トルクメニスタンの大統領が、トルクメンバシで会談し、国際自由経済圏構想を表明した時で、観光圏の名称は「アワザ」とされた。自然環境、歴史文化遺産を生かした、アジアと世界に発信する観光拠点として構想された。ベルディムハメドフ大統領は「(アワザを)トルクメニスタンは子どもの夢が適った国」と形容し、2010年6月1日には、大震災に遭ったハイチの子どもたちを含め、20か国から子どもたちが集まり、国際子どもフェスティバルが開催された。アワザ周辺は、15万本以上の人工植林が完了し、2020年までに40万本の植林が計画されているという。現在国際会議場の建設も計画されており、アジアとヨーロッパの世界平和、経済関係を話し合う国際会議場の建設が計画され、展覧会、科学ビジネスフォーラム、芸術文化イベントが開催される建物も建設される予定だ。カスピ海の海岸は、古代から現代の人々の交流拠点に変わろうとしている。

【トルクメニスタンに行くために】 お問い合わせは、下記の大使館へ

<p>在日トルクメニスタン大使館</p> <p>〒150-0011 東京都渋谷区東2-6-14</p> <p>電話：03-5776-1150 FAX:03-5776-1151</p> <p>特命全権大使 グルバンマンメト・エリヤソフ</p>	<p>在トルクメニスタン日本大使館</p> <p>Trading centre "paytagt", street 1945, building 60 ashgabat Turkmenistan 744000</p> <p>電話：(993-12) 477081, 477082 FAX (993-12) 47703</p> <p>特命全権大使 中島英臣</p> <p>http://www.fm.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/index.html</p>
--	---

【日本とトルクメニスタンの経済関係】

【ネットワーク組織図】H25.3月現在



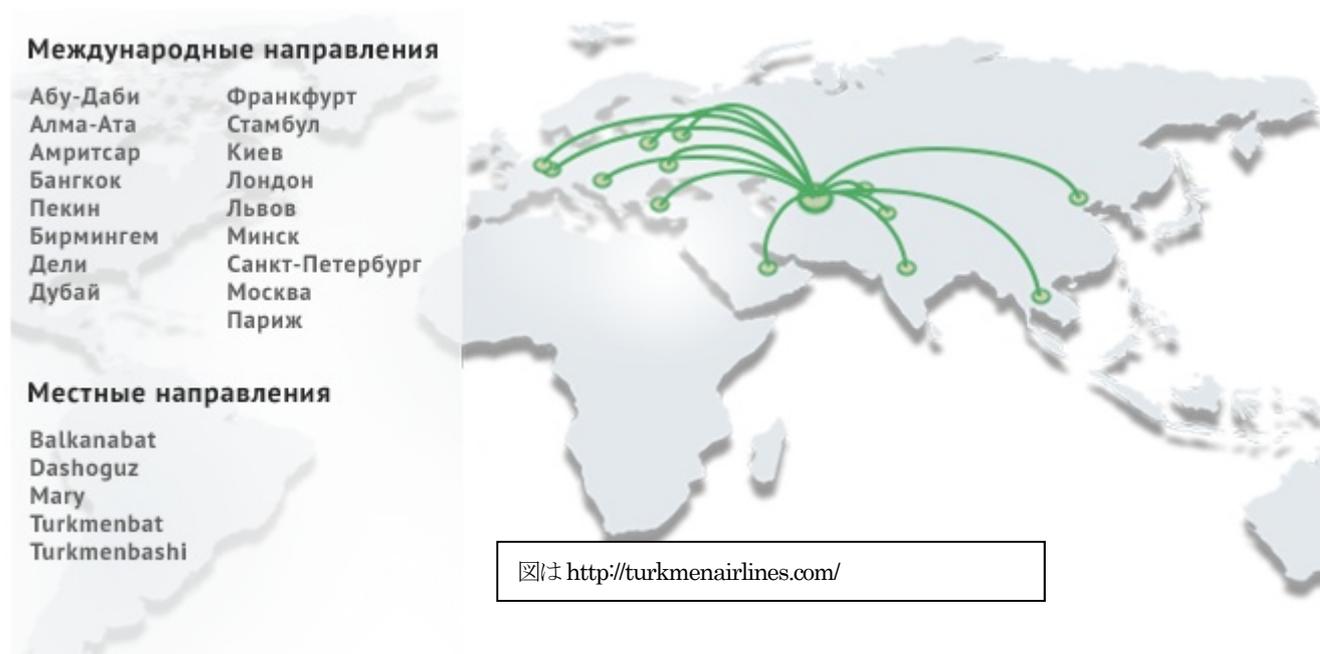
【日本からトルクメニスタンへの航空便ルート】 トルクメニスタンを中心にした飛行機の発着ルート

トルクメニスタンへの直行便ルートはまだない。成田からトルクメニスタンへ行くには下記4ルートがあります。

- ① 成田～トルコ・イスタンブール～トルクメニスタン
- ② 成田～モスクワ・ドモジェドヴォ、シェレメチェヴォ～トルクメニスタン
- ③ 成田～北京～トルクメニスタン
- ④ 成田～ドバイ～トルクメニスタン

また、隣国タシケント経由トルクメニスタンに入るシルクロードツアーを歌った観光コースは多いようです。トルクメニスタン航空は、カザフスタンにも就航しています。旅行会社にお問い合わせください。

この外、インドのアムリトサル国際空港、2015年2月からはマレーシアのクララルンプール国際空港に、トルクメニスタン空港が乗り入れています。



【ビザの取得】

①トルクメニスタンへの渡航には、「招待状」が必要です。お仕事等でビザが必要な方はトルクメニスタン大使館までご相談ください。観光をご希望の方は、日本の旅行会社や現地の旅行会社を通じて招待状を申請してください。

②ビザ取得に必要な書類

- 1) トルクメニスタンの入国管理局から出された招待状のコピー
- 2) ビザを取得する本人のパスポートのオリジナル
- 3) ビザを取得する本人のパスポートのコピー1通
- 4) ビザを取得する本人の写真1枚(横3×縦4)
- 5) ビザの申請書1通(あらかじめ記入した上で御来館願います)

③ビザ取得の手続き

- 1) 招待状を持った状態で電話かメールでユスポフ参事官とアポイントをとる。この際に駐日トルクメニスタン大使館に招待状とパスポートのスキャンデータを送り、ビザ発給にかかる手数料を確定する。
- 2) 必要書類をすべて持って大使館に提出する。(②ビザ取得に必要な書類を参考)
- 3) 駐日トルクメニスタン大使館に再度来館し、ビザを受け取る。このときにビザ取得にかかる代金を支払う。(アメリカドルを現金でご用意ください)

<大使館におこしになれない方>

- 1) 駐日トルクメニスタン大使館に招待状とパスポートのスキャンデータを送り、ビザ発給にかかる手数料を確定する。駐日トルクメニスタン大使館 VISA 係宛 ※必ず「VISA」の文字はローマ字で書く。

E-mail: embassy@turkmenistan-jp.com, TELL: 03-5766-1150, FAX: 03-5766-1151

- 2) 大使館に必要な書類、返信用封筒、同意書、ビザ発行費用を書留で郵送する。

STE "AKHALSIYAKHAT"

Bitarap Turkmenistan Str., 149
744000, Ashgabat - Turkmenistan
Tel.: (993 12) 95 75 99, 95 75 02
e-mail: ahaltravel@gmail.com

STE "MARYSIYAKHAT"

58, Mollanepes Str., Hotel "Sanjar",
Mary-Turkmenistan
Tel.: (993 522) 4 50 40, 4 41 22
Fax: (993 522) 4 50 36
e-mail: marysyahat@yandex.ru

STE "BALKANSIYAKHAT"

Hotel "Nebitchi", Block 199,
745100, Balkanabat-Turkmenistan
Tel.: (993 222) 7 70 36, 7 70 31
Fax: (993 222) 7 70 34
e-mail: balkantour@online.tm
wiza-123@rambler.ru

STE «LEBAPSIYAKHAT»

Turkmenistan, Turkmenabat
Str. Altyn-kok 12
Tel.: (99422) 1-76-85
Tel./fax: 1-76-94
E-mail: lebapsyahat@online.tm

STE "DASHOGUZIYAKHAT"

88, Garashsyzlyk Str., 746300
Dashoguz-Turkmenistan
Tel./fax: (993 322) 5 72 94
Tel.: (993 322) 2 40 15, 2 40 16, 2 40 17,
e-mail: dtourdash@online.tm

"ASHGABATSIYAKHAT" Travel Agency

744013 Ashgabat - Turkmenistan
76, Garashsyzlyk Street
Tel.: +993121 210556, 210557,
210558, 352015
Tel./Fax: +99312) 210561
E-mail: ashgabatasyahat@online.tm

"GRAND TURKMEN" HOTEL

50, Gorogly Str.,
744000 Ashgabat-Turkmenistan
Tel.: (99312) 92 05 55
Fax: (99312) 92 12 51
e-mail: grandhy@online.tm

HOTEL "SIYAKHAT"

60 A, Gorogly Str., 744012
Ashgabat-Turkmenistan
Tel./fax: (99312) 34 31 15, 34 47 47
Tel.: (99312) 34 42 19, 34 42 07
e-mail: siyahat@online.tm

"AK ALTIN" HOTEL

141/1 Magtymguly Ave.
744000, Ashgabat-Turkmenistan
Tel.: (99312) 36 37 00
Fax: (99312) 36 34 94



haryt-siyakhat

www.haryt-siyakhat.com Travel & Tourist Company
69, Azadi, Hotel "Daykhan",
744000 Ashgabat-Turkmenistan
Tel.: (99312) 93 05 19, 93 04 33
Fax: (99312) 93 09 98
e-mail: haryt-az@mail.ru
web-site: www.siyakhat.com

"DAG SIYAKHAT" TOURIST COMPANY

744000, Turkmenistan, Ashgabat,
Azady Str. 69, hotel "Dayhan"
Tel./fax: (993 12) 93 25 59; 93 14 51
E-mail: dag_syyahat@online.tm; tss@online.tm
Web: www.dagtravel.com



65, Azady Str., 744000
Ashgabat-Turkmenistan
Tel./fax: (99312) 93 48 60, 93 18 25
Tel.: (99312) 93 75 18, 93 00 41
(99312) 93 49 63, 93 71 28
e-mail: owadantour@online.tm
trowadan@online.tm website: www.owadan.net



Tourist company "ATLAZ"

Turkmenistan, c. Ashgabat, 744000
50/2, Ata Govshudov
Tel.: (+ 99312) 92 57 24, 92 75 71
Fax.: (+ 99312) 92 75 60
e-mail: atlatz99@bk.ru

"DN TOURS

Tourist company
50, Magtymguly Str.
744000, Ashgabat-Turkmenistan
Tel./fax: (99312) 27 04 39, 27 04 20
e-mail: admin@dn-tours.com
www.dntours.com

AYAN

109/2, Magtymguly Str., 744000
Ashgabat-Turkmenistan
Tel.: (993 12) 93 60 75, 93 60 21, 93 59 44
Tel./fax: (993 12) 93 60 75
e-mail: info@ayan-travel.com
ayan@online.tm www.ayan-travel.com



"ZEHIN" INDIVIDUAL ENTERPRISE

29/1 Magtymguly Ave.
744000, Ashgabat-Turkmenistan
Tel./fax: (99312) 27 41 49, 27 46 48
e-mail: zehin@online.tm
http://www.zehin.narod.ru



"NURANA - AY"

744017, Ashgabat - Turkmenistan,
Turkmenbashi Ave.124.
Phone (W): +99312450820.
Fax: +99312450824
Web site: www.nuranaytravel.com
Skype: nuranay.manager
Facebook: http://facebook.com/NuranayTravel



117/17, Magtymguly Str.,
744000, Ashgabat-Turkmenistan
Tel./fax: 1993 121 93 51 01, 93 51 21
e-mail: saada96@mail.ru
www.saada-tour.com



LATIF

INTERNATIONAL TRAVEL COMPANY

19, Bitarap Turkmenistan Str.,
Ashgabat 744000, Turkmenistan
Tel. (+99312) 93-83-08, 93-83-09, 93-83-30
Fax: (+99312) 93-83-30
E-mail: latif@online.tm, latif.travel@mail.ru
http://www.turkmenistan-latif.com

トルクメニスタンの旅行会社ホテル一覧

【トルクメニスタンの古都メルヴとユーラシア西端の仏教遺跡 加藤 九祚

国立民族学博物館名誉教授/NPOユーラシアンクラブ名誉会長】

【メルヴの歴史】

トルクメニスタンの歴史は、東西南北の諸民族、諸文化と深く結びついている。とりわけイラン、アフガニスタン、とそして現代ではロシアとの関係は深い。メルヴの歴史はそれを物語っている。

メルヴはアフガニスタンから流れ出るムルガブ川の河口部一帯（マルギアナ）に位置している。マルギアナ、マルグシュ、メルヴ、そして現代の都市マリなどの地名は皆Mで始まっており、ムルガブ川のMに由来している。マルグシュは古代ペルシャのダレイオス王のビヒストゥン碑文に出ている地名である。マルグシュは紀元前2000年頃に栄えたムルガブ河口部（今はカラクム砂漠に埋もれている）の大集落地で過去約30年間に、ロシアの考古学者サリアニディ（2014年死亡）らによって掘り出された。トゴロク21号神殿やゴヌル宮殿などの大建築物や遺物が、カラクム砂漠から次々に掘り出され、世界の学界を驚かせた。デルタは、しだいに、ムルガブ川の流れと共に西南へ移動し、今の中心はマルグシュ遺跡から50キロ余り西のマリ市に移っている。そしてマルグブ川はソ連時代につくられたカラクム運河と連結し、カラクム川と名称を変えた。この移動の途中に、古代のギャウルカラ、中世のスルタンカラなどの都市遺跡がある。メルヴは古代ペルシアの後、紀元3世紀にはササン朝、7世紀にはアラブに占領され、11-12世紀にはスルタン・サンジャルを君主とする大セルジューク朝の首都となった。サンジャルが生前自分のために建てたという廟は13世紀前半のモンゴルの来襲からも生き残り、今も壮大な姿を見せている。話はそれるが、サンジャル王が地方小領主の子から身を起し、築いた中央アジア最大のセルジューク朝が彼一代で滅亡し、王自身は1157年、尾羽打ち枯らして、メルヴで死んだ。この話は、人生の運命の転変の良い例とされている。1222年チンギスハンのモンゴルが来襲し、メルヴも破壊された。1510-24年と1601-1747年ペルシャの治下にあった。16世紀頃にトルクメニスタンの北部で、アムダリヤがサリカミシュ湖に流入しなくなり、その地の住民が南方へ移動し、コペトダグ山麓やメルヴ方面へ移住した。1881年1月12日、アシガバード付近のトルクメンの要塞ギョクテペが陥落、1885年までにメルヴも帝政ロシアの治下に入った。ついでに言えば、メルヴのスイカは糖尿病の特効薬とされ、かつては夏期ソ連中から療養に人が集まったという。

【メルヴの仏教僧(寺)院址】

仏教僧(寺)院址は、メルヴのギャウルカラ遺跡（内城はエルクカラという）の城壁内東南隅にあり、ストゥーブと僧院からなっていた。僧院址の調査は1960年、M. マッソンを長とする南トルクメニスタン総合考古学調査団によ



って始められ、1962-63 年、モスクワの考古学者 G. コシエレンコが参加し、ストゥーパ（仏塔）の発掘調査がなされた。この調査団はメルヴだけでなくニサなど広く調査した。僧院址の遺丘の高さは約 7m、南北に伸びていた（95×40m）。建設は紀元 4-5 世紀だとされている。僧院の建物の敷地は約 140 m²、32 室が発掘された。主な建築材料は 40-41×9-11 cm の日干しレンガで、焼成レンガは壁の基礎、粘土の長腰掛（スーファ）や龕の表面だけに使用されていた。壁は白く塗られ、部屋と部屋の間はアーチの天井で結ばれていた。僧院址からは彫刻の断片、壁画断片、舍利容器、仏坐像の線画のある粘土板、陶片文書（オストラコン）、彩画のある壺、テラコッタ（焼いた粘土の小像）などが発見された。出土品のうち、ここでは壺に描かれた彩画を紹介しよう。

壺はストゥーパの側に隠され、中には経文がはいっていたという。壺は取っ手が 2 つ付いたアンフォラ型で高さ 46 cm、厚さ 22.5 cm、画面の主題は人生の楽しみと必然的な終末（死）が描かれた。すなわち貴人の男性の狩猟、美人との楽しい宴会、臨終、出棺の 4 画面である。この画の中の「楽しみ」の部分について、仏教との違和感があるとの指摘もある。

【メルヴの第 2 号ストゥーパ】

1965 年 7 月、トルクメニスタンのメルヴ・オアシス（マルギアナ）にあるバイラム・アリ市の北方 8 km の地点で、建設作業中に 4 体の石製小仏像と 1 体の象牙製小像、数個のササン朝のコイン（起原 549 年のもの）と白樺樹皮に墨で書かれた 1 束の古文書入りの壺が発見された。土器は考古学的に見て 6-7 世紀のもので、壺は舍利容器であった。つまり城壁外のこの地点にストゥーパがあったことが判明した。ストゥーパは 40×40×12 cm の日干しレンガで積まれ、南北が 15.6m、東西が 15.4m の基壇があり、直径 11m の胴部が載っていたことがわかった。この基壇は、中央アジアではもちろん、アフガニスタンを通じても最大クラスであった。

ストゥーパの中には、150 枚の白樺樹皮古文書が入っていた。寸法は 23.5×8 cm。出典は示されてなく、僧が信者に講和をするためのメモ帳であった。内容は寓話（ジャータカなど）、僧の生活の規範である律、説一切有部からの教説の 3 部分からなっていた。この文書はロシアの女性サンスクリット学者ウォロビヨワ・デシヤトフスカヤによって解読され、発表されている。その中の一節は次のとおりである。

「…煮た食物を提供した功勞によって、喜びをもって生まれた人はこの世で楽しく、（転生のとき）ワルナで成功し、知恵を備え、幸せである…」
(終)

今後、ユーラシアンクラブは、トルクメニスタン大使館初めシルクロードの 7 か国大使館と共催で、日本橋三越本店で「アジア・シルクロードウィーク」開催と愛川町での「アジア・シルクロード文化体験交流サライ」開催に向けて、本腰を入れて取り組みます。引き続き皆様のご理解ご支援をお願いいたします。

「岩に刻まれた古代美術 アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」展は、5 月 21 日から 7 月 21 日まで、大阪府吹田市の国立民族学博物館で開催され、企画展としては大変好評を博し、終了しました。今後 9 月 19 日から 10 月 25 日まで、新潟県立歴史博物館で、10 月 31 日から来年の 1 月 11 日まで、横浜ユーラシア文化館で開催され、その後、北海道ほかの地域でも開催の予定です。ぜひご覧ください。私が半年かけて作成した「解説図録」も、大変評価をいただいております。これから、シカチ・アリヤン村を訪れる方に手に取って読んでいただきたいと希望しています。一冊千円で頒布します。ぜひお申し込みください。

ロシア連邦サハ共和国の太鼓を中心とする伝統音楽文化再生を目指す交流は 6 年目を迎え、7 月 26 日、10 人の代表団が来日。1 週間の研修の後、8 月 1 日、「中津川谷才天第 6 回愛川町音楽祭—アジア・シルクロード音楽フェスティバル—笛と太鼓の祭典」でその成果を発表。サハと愛川町の交流は今後も続く。

発行：特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ 発行人：江藤セデカ
住所：〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 1-11-5 TEL：03-5376-9343
支部愛川サライ 〒243-0303 神奈川県愛甲郡愛川町中津 6314-1
TEL：046-285-4895 FAX：046-265-0167 E-MAIL：paf02266@nifty.ne.jp
郵便振替：00190-7-87777 ユーラシアンクラブ お振込の場合：ゆうちょ銀行〇一九店 当座預金 0087777 ユーラシアンクラブ 会費、ご寄付はこちらへ。会費は正会員年間 1 口 3,000 円、学生会員 1,000 円、賛同会員 2,000 円。一口以上のご協力をお願い申し上げます。

<http://eurasianclub.org/>

2015 0815 Non Profit Organization Eurasian Club

編集後記：日本人の間で、西アジア、中央アジアを視野に入れて理解できなかった理由の一つが、トルクメニスタンについての情報が希少であったからだと改めてわかった。人類の文明が、どのように国家の成立を促し、歴史の歯車が動きだし、今日に至る、眼を覆うような惨状、人類の体たらくの秘密は、女系社会から男系社会への移行にあったと見ているが、国家イデオロギー誕生の秘密もこの辺りにある。アジアの「永世中立国」トルクメニスタンの存在は、国家・民族・宗教を超えた人類の未来像につながるかもしれない。一握りの優勢な人々が、地球上の富を独占している以上、若者や子供、女性を含む多くの人々が「棄民」となる運命は変えられない（お）